文学と政治の間で

――戦時中のオーウェル――

照屋佳男

一　はじめに

一九八四年が過ぎ去り、ジャーナリズムにとつてオーウェルは、はや忘れられた存在となつてゐる。一九八四年は、猫も杓子もオーウェル、オーウェルと叫んでゐた一年だつたが、年が明けたとたん、オーウェルの名は殆ど口にされなくなつてしまつた。これは勿論、作家としてのオーウェルの価値の下落を証するものではなく、ジャーナリズムの軽薄を証するのである。軽薄を売り物にしてゐる現今のジャーナリズムは、一個のすぐれた作家をも、言つてみれば「阪神タイガース」並にしか扱はない、といふ事になる。騒がしかつた一九八四年が過ぎて、オーウェル研究家はやれやれといつた気持を抱いてゐるのだが、にはかタイガース・ファンが乱暴狼藉を働いて、昔からのタイガース・ファンの眉をひそめさせたやうに、にはかオーウェル・ファンがジャーナリズムに華々しく登場するのを、苦々しい気持で眺めたオーウェル研究家も多いのである。

繰り返して言へば、オーウェルの文学者としての価値は、一九八四年が過ぎたからといつて、いささかも減らない。海の彼方イギリスでは、一九八五年に、これまで未発表のオーウェルの原稿が、研究家の手でBBC、即ち英国放送協会の膨大な文書の中から発掘され、立派な序文を付けられて出版されたのである。『オーウェル――戦時放送　W・J・ウェスト編（*Orwell: The War Broadcasts*, ed. by W.J. West）がそれである。オーウェルは一九四一年八月から一九四三年十一月までの二年三箇月を、BBCのインド課のプロデューサーとして、出演依頼の仕事、番組の計画編成の仕事など、幾役もこなしつつ多忙な日々を送つたのだが、重要なのはバーナード・クリック等によつて浪費された貴重な二年間などと決めつけられてゐるこの期間が、実は『動物農場』や『一九八四年』を生み出す上で、決定的に重要な役割を果した期間であつたといふ事で、それはウェスト編の本の立証するところとなつてゐる。オーウェル研究の空白部分を埋めるこの書の出版は、先ずさういふ意味で特筆大書すべき事件である、と言はなければならない。けれども、この期間の意義はそれだけに止まらない、といふのも、これはオーウェルが国策に積極的に協力した期間でもあるからである。国策とはこの場合、二百万人の志願兵をイギリス軍に送り込んでゐたインドの忠誠をイギリスにしつかり繋ぎとめておくためにインド（ビルマも含む）向けに、多少とも反ファシズムのラジオ放送を行ふといふ政策である。当時、ナチス・ドイツは強力かつ巧妙なインド向けのラジオ宣伝に乗り出してゐたのであり、チャンドラ・ボースの如き人物は、ベルリンから反英放送を行つてかなりの成果を収めてゐた。そこで敵国ドイツの宣伝の効果を弱めるために対抗措置を取るといふ事が、焦眉の急となつた。ところへ、ドイツのソ連侵攻（一九四一年六月）といふ事態が発生し、「独ソが同盟関係にあつた間は戦争に反対してゐた左翼の諸新聞は、突然くるりと方向を転換し、あらゆる戦線で新たな作戦を開始せよ、宣伝戦を強化せよなど

と声高に要求するやうになつた。[1]」やがて新たな情勢に合はせて情報省内で大臣の更迭が行はれ、新大臣としてブレンダン・ブラッケン（Brendan Bracken）が就任し、情報省の管轄下にあつたＢＢＣ内でも大幅に人事の移動が行はれ、オーウェルがＢＢＣに登場する余地も生じる事となる。なにしろオーウェルはインド生れで、インド帝国の一部だつたビルマで五年間も警官を勤め、その折の経験を夙に『ビルマの日々』と題する長編小説に結晶させ、インドへの深い理解を示して名の売れた作家となつてゐた。その上、オーウェルはイギリス在住のインドの知識人を幾人も友人として持つてゐたから、イギリス帝国主義への協力と解られかねないＢＢＣへの出演を、他の人からの誘ひ掛けだつたら、断つたであらうインド知識人達も、オーウェルからの誘ひなら応じるといふところがあつたのである。かくして、一九四一年八月十八日、オーウェルは、年俸六八〇ポンドでＢＢＣと契約を結び、ＢＢＣインド課の放送プロデューサーとなつたのである。

しかし、ＢＢＣで活躍するに際しては、上述のやうな外面的条件の他に、オーウェル自身の内面に発する動機も与つて力があつた。オーウェルにおける文学と政治の関係を考へる場合には、こちらの方が一層重要性を帯びるのであつて、この内面の深い動機からすれば、国策への協力に一定の限界が伴ふといふのは必然だつた。事実、オーウェルのＢＢＣ勤務は既記の通り、二年と三箇月しか続かなかつた。が、勿論これは、政治と文学の実りある緊張関係にオーウェルが耐へられなくなつた事を意味しない。「政治的戦線でオーウェルが味はつた敗北感は、彼〔オーウェル〕の文学的営為を妨げなかつた[2]」とウェストは書いてゐるが、オーウェルの文学的営為は、文学と政治の関係を必要不可欠の要素としてゐたのである。一九四六年に書かれた「なぜ書くか」（“Why I Write”）と題するエッセイは、オーウェルにおける文学と政治の関係を表はして間然するところがないので、引用してみよう。「私

が作品を書くのは、暴きたいなんらかの嘘、世人の注意を向けたいなんらかの事実があるからである。そして私の最初の関心は聴いてもらふといふ事である。けれども物を書くといふ行為が同時に美的経験でないとしたら、私は本を書くといふ事をなし得ない、雑誌のための長編論説を書く事さへ為し得ない。[3]」「果すべき務めは、身に沁み込んだ好悪の感情を、我々の時代が我々すべてに押しつけてくる本質的に公的な、非個人的な営み」とは、政治の世界の事だが、ここで注意すべきは、オーウェルは政治に嫌悪など示してはゐないといふ事、寧ろ政治を「身に沁み込んだ好悪の感情」と折り合せるべきもの、と看做してゐるといふ事である。オーウェルの場合、虚偽を暴き事実を直視するといふ形での政治への係はりは、「身に沁み込んだ好悪の感情」を本質とする文学への潑剌とした関心と一体だつたのである。実際、さうだつたからこそ、彼は「政治的な目的を欠いた時には、きまつて生気の無い本を書き、美辞麗句や無意味な文や単に装飾的な形容詞や一般に戯言(たはごと)をうつかり書き連ねる羽目になつた[5]」とわざわざ発言したのである。国策への協力は、このやうな政治と文学の関係の一表出に過ぎなかつたと言ふべきで、表出の仕方が不適切だと分れば、これを断念すればよかつたわけである。国策への協力といふ表出にオーウェルにおける文学と政治の関係の本質を捉へたと信じ込んでオーウェルを非難するのはたやすい事であつたらう、事実ジョージ・ウッドカックは次のやうにオーウェル批判をぶちあげた。「同志オーウェル、以前は極左で、独立労働党に属し、アナーキストの擁護者であつた人。そして今、同志オーウェルは、昔奉じてゐた帝国主義への忠誠を誓ひ直し、インドの民衆を欺すのを事とするイギリスの宣伝活動をBBCで担つてゐる[6]。」(ウッドカックは自らのオーウェル批判の浅薄をすぐに悟つたのであらう、この非難の直後オーウェルと仲直りし、終生変らぬ友人となつてゐる)。

二　ウェストのクリック批判

既記の通り、オーウェルは国策への協力には限界のある事を悟り、BBCの放送プロデューサーの職を二年三箇月で辞するに至つたのだが、それは彼の関心を文学と政治の関係から逸らさせはしなかつた。文学を政治との抜き差しならぬ関係において捉へる姿勢がその後も持続してゐたからこそ、彼はすぐれた作品を生み出し得たのであつて、さういふ次第が、ウェストの序文から自ら明瞭になるのである。「戦争が終つた時、同時代の作家達の中で並はずれた業績をひつさげて現れたのは殆どオーウェル唯一人であつた」[7]とウェストは断じ、更に言ふ、「BBCで働く事は、オーウェルの見方からすると、原則を犠牲にするやうなものではなかつた」[8]と。ウェストに言はせると、BBCに勤めてゐた二年間は、『動物農場』と『一九八四年』を、文体上、テーマ上それに先行する作品から区別する大きな裂け目の如き期間であり、この期間に、オーウェルは革命的な変化を遂げるための準備を整へたのである。このやうな捉へ方は、バーナード・クリックに対する根底的な批判を意味せずにはおかない。クリックは、その浩瀚な著書『ジョージ・オーウェル――ある生涯』(*George Orwell : A Life*)の中で「彼〔オーウェル〕の同僚達が後に口をそろへて言つた事だが、それから〔一九四一年八月十八日から〕貴重な二年間、彼の才能はインドや東南アジアの知識人向けの教養番組の製作に浪費されたのである。しかもこの番組の聴き手は殆どゐず、番組自体はその極く少数の聴き手にさへ影響を与へなかつたらしい」[9]と言つてゐるが、BBC時代のオーウェルを語る時、クリックは浪費された貴重な二年間といふ見方から遂に離れる事が出来ない。クリックは、世人が最悪の状

態としたところを僥倖と呼び得たオーウェルの資質に思ひ及ぶ事など出来ないのであり、それ故、オーウェルにおける文学と政治の関係の根柢の部分に眼を据ゑる事も出来ない。そこから、クリックはなぜオーウェルはＢＢＣを辞めなければならなくなつたか、といふ点でもウェストとは大分違ふ、いや殆ど正反対の見方を採る始末となるのだが、この場合もウェストの方が正しいのである。「真理省（『一九八四年』で描かれる）の全体主義的仕組みは、ＢＢＣやオーウェルの最初の妻がよく知つてゐた戦時中の若干の省に対するスウィフト流の諷刺なのであり」[10]とクリックは書いて、ＢＢＣの全体主義的雰囲気にうちひしがれてオーウェルは辞めたのだとと示唆してゐる、ＢＢＣ辞職直後にオーウェルの発した言葉、即ち「非常に汚れたブーツで踏み潰されたオレンジのやうな感じ」は主としてＢＢＣに向けられたもの、とクリックは解してゐるのである。この解し方は浅薄である、と評すべきである、といふのもオーウェル自身一九四三年九月二十四日、辞意を表明した手紙の中で次のやうに述べてゐるからである。

> ＢＢＣの方針に賛成出来ないといふ理由で辞めるのではありません。まして何か不平の種があつて辞めるのでもありません。ＢＢＣでは最も寛大に遇されましたし、すこぶる大幅な思想・行動の自由も与へられてゐました。個人の立場に立つたら言へないやうな事を放送せよと強制された事も一度もありません。[11]

ウェストは、諷刺はＢＢＣに向けられてゐるのではない、オーウェルはＢＢＣを擁護してゐたのである、ＢＢＣにではなくて、検閲局を通じてＢＢＣを統制してゐた情報省に向けられてゐる、と資料に基づいて述べてゐるが、これは確かに説得力のある発言である。「ＢＢＣは他のどのやうな言論機関も受けなかつたやうな徹底した検閲に

曝されてゐた」[12]のだが、その検閲は情報省によつて行はれてゐたのであり、オーウェルも手紙の中で再三再四、検閲に言及してゐる。ウェストが言ふやうに、情報省内に陣取る「見えざる勢力」[13]をオーウェルが漠とながら常に〈敵〉として意識してゐたといふのは、否定し得ぬところであらう。とは言へ、情報省による検閲は、BBCで過した日々の意義深さを帳消しにするていのものではなかつたと言ふべきで、情報省の検閲は、それだけでは辞任の理由にはなり得なかつた。(そもそもBBCに勤めようと決意した時、検閲の行はれてゐる事ぐらゐは十分承知してゐた筈だ)、検閲に加へて、客観状勢の変化によつて情報省の対インド政策が変つた事が、オーウェルの辞職の一因となつた事は疑ひ得ないだらう。ウェストによると、情報省は、日本のインド侵略に備へてインド人の士気を高めるといふBBCインド課の当初の目的が、日本軍の勢ひの衰へによつて、意味を失つてくると、今度はインド独立運動に弾みがつくのを恐れなければならなくなつたのであり、情報省は、インド課はインド独立運動を抑へるといふよりは寧ろ煽る機能を果してゐると見るやうになつた。さうだとしたら、敏感なオーウェルがさういふ風向きの変化を察知しなかつた筈はない。情報省の政策の変化と並んで、オーウェルが教育に関して過激な意見を持つキングスリー・マーティンの如き左翼ジャーナリストを起用し続けて、遂に「情報省内の見えざる勢力」の怒りを買ふに至つた事も辞職のいま一つの原因であつた。この時点でオーウェルは、国策への協力に限界のある事を、いやといふほど思ひ知らされたのである。

辞職に際しては、BBCでの自分の仕事の効果を疑ふといふ気持も働いてゐた——先に取り上げた上司宛の〈辞表〉の中で「インド向けのイギリスの宣伝放送は殆ど絶望的な仕事」[14]と言つてゐるところからもそれは推知出来る。けれどもこの〈辞表〉の中で同時に「文学作品やジャーナリスティクな文章を書くといふ通常の仕事に戻る

事」[15]の意義に触れるのを忘れないのであつて、この内発的な動機こそが最も注目に値するやうに私には思はれる。なぜならこの動機は、文学と政治の関係へのオーウェルの関心が衰へる事を知らずに持続してゐた事、いや寧ろBBC時代に新たな素材、新たな技法、新たな刺戟を得てこの関心は一層潑剌としたものになつた事を物語るからである。このやうな潑剌とした関心の中では、情報省の検閲にしても恰好な素材の一つに過ぎなかつたとさへ言へさうで、情報省そのものが『一九八四年』の「真理省」と化してゐるとする見方は余りにも粗雑であると言はなければならない。要するにオーウェルは、BBCに勤務してゐた二年間に『動物農場』と『一九八四年』を書き上げるのに必要な素材と技法と刺戟をたつぷり得たと理解すれば、事は足りるのであり、政治と文学の関係に対するオーウェルの根柢的な姿勢を捉へる上でも、このやうな理解の仕方は益するところがあるだらう。

第一、情報省の置かれてゐた白亜の建物は、ロンドンの他の建物を圧して高く聳え、オーウェルの興味を引かないわけにはいかなかつた。小説の素材として用ゐたいといふ強い意欲をそそられた筈で、事実ウェストは情報省の建物は『一九八四年』の「真理省」の建物のモデルだと言つてゐる。（しかしそこから、その点だけを捉へて、情報省は「真理省」と同様の全体主義的雰囲気に領されてゐたと言ふわけにはいかない。もしもさうだつたとしたらオーウェルの当時の文筆活動は不可能になつてゐた筈であるが、実際にはオーウェルはBBC時代に多量のすぐれた散文を残してゐる。）情報大臣ブレンダン・ブラッケンは、ウェストによると、その頭文字を取つてB・Bと愛称されてゐた人物だが、『一九八四年』のビッグ・ブラザーもB・Bと呼ばれてゐるところを見ると、ブレンダン・ブラッケンはオーウェルにかなり強い印象を与へた人物に相違ない。情報省はなるほどBBCを統制し、検閲を行つてはゐたが、オーウェルが勝手に嘘の宣伝を行ふのを許容してゐたし（彼は、日本がソ連に侵攻すると信じてゐな

かつたのに、日本はソ連侵攻を計画してゐると、インド向けの放送で主張し続けた、とはつきり記してゐる)、彼が尊敬する作家達、情報省にとつては必ずしも好ましくない作家達——例へば、T・Sエリオット、E・Mフォースター、ディラン・トマス、スティヴン・スペンダー、ハーバート・リード、シリル・カナリー、エドマンド・ブランデン——をひんぱんに出演させるのを妨げはしなかつた。ウィリアム・エンプスンはBBCでオーウェルの同僚だつたのだが、ウェストは、資料に基づいて、『一九八四年』に登場する詩人アンプルファストのモデルはエンプスンと受け取られても不思議ではないと示唆してゐる。これら文学者との交友関係は意義深いものがあつたのであり、とりわけE・M・フォースターのオーウェル宛の書簡(ウェストはその全部を収録してゐる)は、二人の親密な関係のみならず、二人の間でどういふ作品が話題になり、どういふ作品が読まれてゐたかを教へてゐる点で興味深い。フォースターからオーウェルに宛てた一九四二年十月の手紙を見ると、二人の間で出版されて間もないジェームズ・バーナムの『管理主義革命』(*The Managerial Revolution*)が話題になつてゐた事が分るし、現にフォースターは、放送で『管理主義革命』を取り上げるつもりだと述べてゐる。

一方、この二年間に不快な人物と係はりを持つ羽目になつた事も事実で、ソ連共産党の熱狂的な支持者であつたJ・D・バーナル教授がさういふ不快な人物の一人であつた。オーウェルの方はソ連共産主義を腹の底から嫌つてゐたのだが、中世以後の近代科学史といつたテーマでシリーズものの番組を計画した時、公正であらうと努めてゐたオーウェルはバーナル教授に放送を依頼し、バーナル教授は二つ返事で二回分の放送を引き受け、残りの分はバーナル教授が同僚の中から指名した人達に放送してもらふといふ事で話は纏まつた。ところがちやうど同じ頃、BBCの国内向け放送を担当してゐたガイ・バージェス(戦後ソ連のスパイである事が発覚し、ソ連へ逃れ、そこで

殘した男）から同様の依頼を受けると、教授はオーウェルとの約束を反故にし、ガイ・バージェスの課で放送を行ひ、オーウェルに一片の謝罪も行はない、といふ事実があつた。戦後オーウェルは、コミュニストのコントロールする『モダン・クォタリー』誌に載つたバーナル教授の論説を取り上げて言つた、バーナル教授は事実上「政治的便宜主義が要求する場合には、いかなる道徳的規準も廃棄する事が出来るし、また廃棄しなければならない」と主張してゐる、「バーナル教授の観点からすれば、その時どきの政治的必要に応じて美徳は悪徳となり、悪徳は美徳となり得るといふのは明白である」[16]と。オーウェルがかくも痛烈にバーナル教授を批判しなければならなかつたその背景の一端がウェストによつてはじめて明らかにされたのである。

既に長編小説『空気を求めて』の中で、全体主義に傾斜した、権力欲の塊のやうな知識人を見事に描写し得てゐたオーウェルが、バーナル教授を知的誠実の敵と見抜くのに、大して洞察を要しなかつたに相違ない。ウェストは、ガイバージェスとバーナル教授が親密な関係にあつた事をオーウェルが知つてゐたかどうか、またガイ・バーエスジがバーナル教授にオーウェルの徹底したソ連共産主義批判を知らせたのかどうか、は不明であるとしてゐるが、ガイ・バージェス、即ちＢＢＣでのオーウェルの同僚、友人、そしてイートン校の同窓でベーシック・イングリシュ（『一九八四年』のニュースピークのヒントになつた英語）にオーウェルと同様に興味を示してゐたこの男は、『一九八四年』に登場する知識人、即ち全体主義を知的・根柢的な面で支へる役を担つてゐる知識人オブライエンのモデルとしてうつてつけだつたらう、とウェストは言つてゐる。たしかにウェストの言ふ通り、『一九八四年』でオーウェルがスウィフト流の諷刺の対象にしたのは、ＢＢＣではなくて、検閲に躍起になつてゐた情報省官僚だつたのだらうが、オーウェルにとつてもつと切迫した諷刺の対象は、オーウェルの周囲に蠢いてゐたバーナル

やガイ・バージェスのやうな知識人達であつたに相違ない。

ところで、権威あるオーウェル伝と喧伝されてゐるクリックの本の間違ひ箇所が、ウェストによつてはじめて指摘されたのだが、BBC内に巣くつてゐた全体主義志向の知識人の存在にまるで思ひ及ぶところのなかつたクリックは、かへつて、オーウェルを嘘つきと非難するスティヴィ・スミスなる三流の女流作家の手紙の一節を、文脈から切り離して引用して、戦時中のオーウェルに関して歪んだ像を読者に提供し、その不当をウェストに批判されてもゐる。

三　人間行為の限界

「オーウェルの観点からすると、BBCで働く事は、原則を犠牲にするやうなものではなかつた。」といふ事は、文学的にも、この期間は実り豊かであつたといふ事で、ウェストの指摘する通り、この期間にオーウェルは技法上の革新を遂げたのである。オーウェルは、一九四二年三月十日に行つた「ヨーロッパの再発見」("The Rediscovery of Europe") と題するラジオ放送の中で、現代文学の出発点はT・S・エリオットが「プルーフロック」("Prufrock") を発表した一九一七年であるとしてゐるが、これはオーウェルの技法に対する強い関心が下させた断定に他ならない。BBCでの二年間、オーウェルは、ウェストの表現を借りると、「イギリス文学の全分野を渉猟し……[17] 放送原稿の大部分を自ら書き、実際に放送されるものは一つ残らず彼が書き直したり編集したりするといつた具合であつた。かういふ仕事によつてもたらされた感情的、知的エネルギーは、適切な時間と刺戟が与へられさへすれ

ば、『動物農場』のやうな作品をただちに生み出したのである。」[18] ラジオ放送用に、しかも英語を必ずしもうまく解しないインドの大学生や知識人向けに、オーウェルの手で脚色された作品、即ちアナトール・フランス、H・G・ウェルズ、アンデルセン、イグナチオ・シローネの作品が、ウェスト編の本に収録されてゐるが、かういふ脚色の仕事が新たな技法をオーウェルに体得させる上で演じた役割は大きい、と言はなければならない。ウェストは、『動物農場』の物語の形式上の完璧は、脚色の仕事で身につけた技法に負ふところ大であつたと指摘し、更に、特にシローネの「きつね」（"The Fox," 1937）を脚色した事は『動物農場』を書く直接的なきつかけとなつた、と言つてゐる。

オーウェルにとつて技法とは、何よりも先づよい散文を書く事を意味してゐた。人は、個性といふデーモンに駆り立てられて作品を書く、「それでも己の個性を消し去らうと絶えず苦闘しなければ、読むに耐へるものは何一つ書けないといふのも本当である。よい散文は窓ガラスのやうに透明である」[19] と「なぜ書くか」でオーウェルは語つてゐるが、オーウェルは『動物農場』に至つてはじめて窓ガラスのやうに透明な散文を我が物とし得た、と言つてよいのである。シローネの「きつね」とオーウェルの脚色した「きつね」を比較してみると、オーウェルの「きつね」の明晰で、簡潔で、平易で、凡そ無駄のない、それでゐて劇的効果十分な――といふ事は視覚に訴へるやうな――描写は歴然としてくる。ウェストの言ふやうに、絶えず時間に追ひまくられ、異常にせきたてられて仕事をしてゐたために簡潔、平明に描写する力が否応なしに身についたのかも知れぬ。シローネの散文（但しこれはイタリア語からの翻訳だが）とオーウェルの散文の違ひを知るには、次の一例だけで十分であると思はれる。

シローネ

Next day Silvia took up the 'engineer's' breakfast, but there was no answer. The door was locked. Certain that something had happened, Silvia started crying out, and the whole family came to see what was the matter. Daniele smashed the door in.[20]

オーウェル

Next morning Silvia took up the engineer's breakfast. There was no answer when she knocked at his door. She knocked again, more loudly. There was still no answer. Immediately Silvia was certain that something was wrong. She cried out for others.

Silvia: Father! Father! I think there's something the matter here. He doesn't answre, and the door's locked.

Daniele: One moment. I'll get the door open for you.[21]

けれどもここで注意を要するのは、オーウェルの場合、「政治的目的と芸術的目的を融合して一個の全体にする」[21]といふ観点を離れて、技法の問題は考へられなかつたといふ事である。先に引用した通り、オーウェルは「政治的目的を欠いた時は、きまつて生気のない作品を書いてしまつた」のであるが、この一句の意味するところは、技法は政治的目的と密接不可分の関係にあつたといふ事、政治的目的があつてはじめて、技法の問題が意識に上り、技

法の革新が行はれ得たといふ事である。そして興味あるのは、政治的目的は、政治の世界に対する態度や広く人生観を抜きにしては考へられなかつた、といふ事である。ところで、オーウェルはシローネの「きつね」のどこに惹かれたのか、と問ふ事は、オーウェルはシローネの政治目的、政治の世界に対するシローネのどのやうな態度に惹かれたか、と問ふ事と異ならないのであり、シローネの「きつね」にオーウェルが惹かれたのが次の点であつた事に間違ひはない。即ち、主人公ダニエレは反ファシストであるけれども、政治の世界に対して適切な態度をとり得ないが故に、大いなる害悪をもたらさずにはおかないといふ点である。作品の舞台は、イタリアとの国境に接したスイスの或る農場であつて、ストーリーはダニエレが豚の分娩（この豚は『動物農場』に豚を登場させようと、オーウェルに思ひつかせるに至つた）の仕事に熱中してゐるところから始まる。ダニエレは、日中出稼ぎに国境を越えてスイスへやつて来るイタリアの労働者達と連絡を取り合つて反ムッソリーニの運動を行つてゐる指導的人物だが、ある日そのダニエレの家に重傷を負つたファシストの工作員・スパイが偶然ころがり込む。ダニエレ一家は、この男の正体を知らず、この男の看病に献身し、男は庭を散歩出来るまでに回復するに至るが、やがて、この男の正体は、実際にこの男からスパイ活動への協力を頼まれた女の証言で、ダニエレの知るところとなる。しかしダニエレは、「なるほどこの男はスパイであり、敵である。けれども言葉を交す事の出来る一個の人間である」といふ思ひに捉へられ、この男を「烈しく憎むべきであつたのに憎む事がどうしても出来なかつたのである。」ダニエレの同志アゴスティノは「きつねは罠にかかつたのだ、生きたまま逃す手はない」と断固主張するが、ダニエレは「あの男はスパイだつた、が今は俺の客人だ」などと言つて遅疑逡巡するばかりである。ある午後、スパイはダニエレの大事にしまつてあつた極秘書類を手に入れ、まんまと逃げ果せ、イタリアでは翌朝二十人の労働者が逮捕さ

れ、同志のアゴスティノもスイスから追放される身となる――（引用はオーウェルの「きつね」から）。

オーウェルはダニエレの直面したディレンマを興味深い事と思つたに相違ないのだが、彼自身はこのやうなディレンマからの脱出は不可能ではないと信じてゐた。脱出の方式は、「人間にとつて通常選択は、善と悪との間にあるのではなくて、二つの悪の間にある」[23]といふ表現によつて示される。特に政治の世界において、二つの悪のうちから「よりひどくない悪」(lesser evil) を選択する事の意味するところは大きいとオーウェルは考へたのであり、「きつね」の場合で言ふと、同志のアゴスティノは二つの悪、即ち一人のファシストが死ぬ事と、二十人の労働者が死ぬ事との間から選択する術を知つてゐたのに対し、ダニエレは一つの善、即ちスパイが客人として遇される事と一つの悪、即ちスパイが死ぬ事との間からしか選択出来ないといふ事をオーウェルは見抜いてゐたのである。

もしも責任感や義務の遂行を道徳の中心に据ゑるとしたら――実際にも道徳的感情は義務の遵守の産物であるが――二つの悪のうちからよりひどくない悪を選ぶといふやり方は、まつたうであるといふ事になるだらう。大抵の場合、さうする以外に義務の果しやうはないからである。オーウェルはさういふ選択の仕方を道徳的であると自覚してゐたのであり、国策に協力する場合の根柢にあつたのもさういふ自覚だつたのである。文学と政治の関係に思ひを致す時にも、この自覚は動かしやうのないものとしてオーウェルの内部にあつた。「進歩思想」は「権利」を道徳の中心に据ゑるといふ点でもオーウェルの道徳観と対立するが、その「進歩思想」は、選択は善と悪との間にのみあると信じて自足し、「善」を選択してかへつてこの世に大いなる害をもたらす結果となる――。

オーウェルは人間の行為、特に政治的行為の限界を意識する点でペシミストだつたのだが、しかし「キプリング論」(“Rudyard Kipling,” 1942) が示すやうに、このやうな限界の意識は思考の鍛錬と成熟に資するところがあるとも

考へてゐた。即ち「キプリング論」において、言ふ「イギリスの野党の如く、万年、歳費だけは年金の如く貰ひ受けるやうな存在になると、それに応じて、思考の質は悪化するのである。更に、ペシミスティクな、或いは反動的な見方を抱いて生に臨む人は誰であれ、事件によつて、正しかつたと証明される仕組みとなつてゐる。といふのもユートピアは決して実現しないからである」[24]と。既述の通り、オーウェルは、BBCでエリオットやロレンスやジョイスの技法を高く評価するのを旨とした「ヨーロッパの再発見」と題する比較的長いエッセイを発表したのだが、彼の場合、技法の革新を評価する事は、その技法と一体のペシミスティクな人生観を評価する事に通じてゐたのである。「浅薄な進歩思想に対する彼等〔エリオットやジョイス〕の反撥は彼等を政治的には間違つた方向〔保守反動の方向〕に駆り立てた、しかし彼等の書いたものは、彼等に直に先立つ作家達〔ウェルズやバーナード・ショー〕の書いたものよりも成熟してゐるし、視野も広い……彼等はヨーロッパとの繋がりを回復し、歴史の感覚と悲劇の可能性を取り戻したのである。」[25]これは重要な発言であるし、第二次世界大戦中にこのやうな発言を為し得た左翼は、それだけでも偉大である、と言はなければならない、技法の革新とは無縁であつたウェルズやショーの場合、美的感受性の欠如と過去への無関心が一体となつてゐる、のみならず進歩への信仰はヨーロッパの影響を受けないといふ事とも結びついてゐる。これに反して、エリオットやロレンスやジョイスのペシミスティクな人生観は、過去への関心に裏づけられてをり、彼等は「人類史をすつかり頭の中に入れ、己の棲息してゐる場所と時代とからヨーロッパや過去に目を注ぐといふ態度」[26]を保持してゐた。

「復讐、愛国心、亡命、迫害、民族憎悪、宗教的信条、忠誠、指導者崇拝といつたやうなテーマが、突然、またしても実在性を帯びてきた……我々は淀んだ水から脱して歴史に戻つたのである。」[27]歴史に学ぶ生き方とは、オー

ウェルにとつて、国を愛するのを義務と心得る事、「マキャヴェリは深遠な思想家」[28]と考へる事と無縁ではなかつたのである。それはまた、人間性の無責任な濫用に陥るまいとする態度とも無縁ではなかつたのであつて、人間性に関しておめでたい見方をしてゐたバーナード・ショーなどは「世界を一種の超庭園都市」[29]に変へようとしてゐた、とオーウェルは評してゐる。ひよつとしたら「人間性といふものの無責任な濫用」（これは小林秀雄の言葉だが）に陥るまいとする態度に、人間行為の限界を意識させてやまぬ政治に係はりつつ、文学を活かし得たオーウェルの秘密を解く鍵が潜んでゐるのかも知れず、この態度は、責任感や義務の遂行の重要性の自覚を介して、平和主義（pacifism）の批判に繋がつて行く点で見逃し得ぬ意味を蔵してゐるやうに思はれる。

四　オーウェルと小林秀雄

第二次世界大戦のさなかに書かれたオーウェルの文章を丹念に辿つて行く者は、海を隔てた国、しかもイギリスにとつて敵国であつた国、即ち日本で盛んに物を書いてゐた文芸批評家小林秀雄との類似に驚かされる。この二人の文学者は、それぞれの国の国策に協力しながら、人間性をまるごと捉へた点で、即ちそのいはゆる「明るい」面のみならず「暗い」面をも見詰めた点で共通する。両者は人間性を無責任に濫用しない事を通じて思考を鍛へ、文章を磨いて行つた点でも共通するところがある。

そのやうな共通点に気づかせてくれるのは、小林秀雄全集第七巻『歴史と文学』に収められてゐる文章、即ち、一九三九年（昭和一四年）から一九四三年（昭和一八年）にかけて書かれた文章と、ジョージ・オーウェルのエッ

セイ・時事評論・書簡集第二巻『右であれ左であれ我が祖国』（一九四〇―一九四三）に収録された文章とである。もしもオーウェルが戦時中に小林秀雄の文章に接する機会を得てゐたとしたら、熱烈な共感を抑へる事が出来なかつたに相違ない。かういふ〈仮定法過去完了〉に誘はれるのは、オーウェルが日本に対して偏見を抱く事の少なかつた作家であつたといふ一事も関係してゐる。偏見の少なさは、一九三四年にラフカディオ・ハーンの著作を読んだ事に由来するのかも知れないが、それはともかく、例へばオーウェルは一九四二年に次のやうに書いてゐる。「ドイツが真の敵であるといふのが広く行き亘つた意見である。日本軍の残虐行為に対する憎しみを煽らうとする試みは失敗したのである。私の印象では、ドイツが戦場にとどまる限り、イギリスは限り無く戦ひ続けるだらうが、万一ドイツがうちのめされたら、万人に理解可能な、真の戦争目的が提示されない限り、イギリスは日本との戦争を継続しないだらう。」[30] また例へば「多くの、恐らくは大抵のインドの知識人は感情的には親日である。彼等の観点からすると、イギリスは敵なのである」[31]とも書いてゐるが、勿論偏見が全くなかつたわけではない、それは、一九四二年五月三〇日の日記の中の次の一句からも推察出来るのである。「苦しみを訴へてゐる猿のやうな顔をした、すこぶる黄色い肌をした小柄の初老の日本人。」（序に言ふと、日本人を猿としてに描くといふのは一九二四年頃から欧米のジャーナリズムの常套であつたらしく、斎藤茂吉も「その頃独逸の或るポンチの雑誌には米国に於ける日本人移民問題を取扱ひ、日本人を『猿』に画いてあつたので、私はひどく不快に思つたのであつた」と記してゐる。）[32]

オーウェルは繰り返し平和主義を批判した、そして平和主義批判は愛国心の肯定と無関係ではないが、平和主義批判の文の一つが日本への言及を含んでゐるのは、興味ある事である。「運動としての平和主義は、外国から侵略される恐れや征服される可能性のない国にしか殆ど存在しないといふのは事実です。それ故、平和運動は常に海洋

国家に見出されるのです。（日本にもかなり大掛りな平和運動が起つてゐるとさへ私は思ひます）。……平和主義は統治の問題に直面しようとはしないし、平和主義者は統治する側の身になつてみる事をしない人間として、つねに物事を考へます。それ故、私は彼等を無責任と呼ぶのです。」[33] しかし、我々はオーウェルの平和主義批判は、文学の擁護に直結してゐるといふ事にも注意しなければならない。「平和主義の『メッセージ』を打ち出すために書かれた」ある小説を取り上げてオーウェルは言ふ、暴力を憎むのはよい、けれども暴力は人間社会に不可欠のものであり、「美しい感情も高貴な生き方も暴力を支柱とするところの不正の果実なのである」[34]と。暴力とはここでは軍隊や警察の存在そのものを指すのだが、この暴力の意義に思ひ至る事が出来ず、「社会を結び合せるのは警官ではなくて普通の人間の善意なのだが、この善意はこれを支へる警官がゐなければ力を持ち得ない」[35]といふ根本的な事実から目を逸らせたり、「睡眠中の自分達の身の安全を保つてくれる制服を嘲笑したりする」平和主義者は、徹底的に物事を考へる知的勇気を持つてゐない、それ故、彼等の作品は浅薄である事を免れない、とオーウェルは考へるのである。平和主義を批判してオーウェルは、文学は平和の営みではない、と言つてゐるのではない。文学が平和の営みである事は百も承知してゐる、けれども平和の営みたる文学を平和主義のための道具と化し、この道具をして戦争といふ実在物に立ち向かはせようと躍起になるのは国の安全を保つ上で有害であるのみならず、文学、よき文学を生み出す上でも、益するところはない、いや、かへつて害となる、と言つてゐるのである。

一九四〇年（昭和一五年）小林秀雄は、文学と戦争に関してオーウェルに類似した考へを次のやうな文で表した。

文学は飽く迄も平和な仕事だ。将来の平和の為の戦でさへない、仕事そのものが平和な営みなのである……どんな大文学も蟻一疋踏み潰す力は持つてゐない、どんな大思想も、たつた一人の人間の空腹を満たすに足りない。この簡単な物の道理が、徹底して合点され、本当に心に応へたならば、言葉の力に頼つて、実際の物の動きを、どうかうしようといふ、文学者の曖昧な感傷的な自惚れは消えてなくなるだらう。

文学は飽く迄も平和の仕事ならば、文学者として銃を取るとは無意味な事である。戦ふのは兵隊の身分として戦ふのだ。……文学者としては、飽くまでも文学は平和の仕事である事を信じてゐる。一方、時到れば喜んで一兵卒として戦ふ。[36]

オーウェルも小林秀雄も、文学と戦争を別々の領域に属するものとして、峻別してゐるやうに見える。しかし二人は、二つの領域を深いところでは、即ち、人間性といふ面では結びつけてゐた、戦争も文学もともに人間性の発露としてその存在の領域を有してゐるといふ事は認めてゐた、一方をもつて他方を溶解し去る事は出来ない、溶解出来るとしたら、それは人間性を無責任に濫用した時に限られる、と考へてゐた。小林秀雄は「戦争と平和」と題する有名な文章で「戦は好戦派といふ様な人間が居るから起るのではない。人生がもともと戦だから起るのである」[37]と書き、オーウェルは「愛国心や武勇の入り込む余地のない人生観」即ち「快楽主義的人生観」のまやかしを衝いた。オーウェルはまた「人間は快適、安全、労働時間の短縮、衛生、産児制限、総じて常識を求めるだけではない、断続的にではあれ、人間はまた、太鼓、旗、忠誠示威の行進は言ふに及ばず、闘争や自己犠牲をも求める」

と言ひ、「ファシズムやナチズムは、経済理論としてはどうであれ、心理的には快楽主義的人生観より遙かに健全である」[38]とまで書いた。小林秀雄はこれに呼応するかのやうに、「決断だとか勇気だとか意志だとかを必要とする烈しい行為にぶつかる機もなく、又さういふ機を作らうとも心掛けず、日々を送つてゐる人間は、心理の世界ばかりを矢鱈に拡げて了ふものだ……退屈してゐる人の心は恐ろしい。心理的な地獄絵といふものは、覗ける人には透けて見えるものである」[39]と書いたのだが、「退屈してゐる人」はオーウェルの謂ふ快楽主義的人生観の持主にぴつたり対応するのである。二人はどんなに切羽詰まつた状況においても人間性そのものに錘りを下すのを忘れない。人間性に潜む「ドン・キホーテ風の面」と「サンチョ・パンサ風の面」、この両面に表現を与へるのを忘れない。小林秀雄の場合、人間性の上にどつかと腰を据ゑる態度は、「マキアヴェリについて」と題する文において、躍如としてゐる。

> 彼〔マキアヴェリ〕はたゞ人間といふ実物を見てゐる、絶えず見てゐる[40]……彼は人間生活の様々な姿にいちいち照し合はさなければ、決して政治といふものを口にしてゐない。人間理解が、政治を理論化し空想化させぬ錘りの様な役をしてゐる。[41]

政治を空想化させて、「非常時の思想」に頼るのは、平和主義者に限らない、軍国主義者もまた「非常時の思想」に頼つてゐたのであり、マキアヴェリを語る時の小林秀雄の批判の矛先は「官僚化した軍部」にも向けられてゐたと解しなければならない。オーウェルも小林秀雄と同様に、官僚との間に不調和を来し、国策への協力から身を退

くに至つたのだが、それは二人が自らの戦争観の非を悟つて退いたといふ筋合のものでは決してない。それは寧ろ二人が文学と戦争を人間性の観点から眺める事に固執したといふ筋合のものであり、二人はさうする事によつて、文学を生き延びさせる事に成功したのである。

このやうに人間性にしつかり錘りを下して、文学を救ひ出すといふ営為は、知性を鍛へる事とも無縁ではなかつたのである。人間性に関しておめでたい快楽主義的見方に陥らないといふのは、我々の思考を手応へあるもの――人間性の一面しか眺めない平和主義者にとつては不快なもの――に基づかせる事に他ならなかつたからである。手応へあるものとは「毒」を含んだものの事でもあるのだ。「毒」を薄めるやうな真似をしてはいけない、と小林秀雄は再三再四言つたのである。これはいはゆる進歩思想ではない、しかし進歩思想からよい文学が生れるのはまれなのであり、それ故オーウェルも「概して言へば、我々の時代の最良の作家の傾向は反動的であつた」[42]と言ひ切つたのである。

無責任に濫用される事のない人間性において、愛国心は正当な位置を占めてゐる、オーウェルは「先祖返りのやうな愛国心」[43](the atavistic emotion of patriotism)といふ表現を用ゐ、小林秀雄は「性慾の様に疑へない君のエゴティスム即ち愛国心」[44]といふ表現を用ゐて愛国心を人間性の中にしつかり位置づけたのだが、オーウェルの場合、「愛国心は知性と再び結びつかなければならない」[45]といふのは〈定言命法〉と化してゐた。「愛国心と知性の乖離」[46]を当然の事と看做す知識人は庶民の文化から絶縁するのが落ちである、なぜなら愛国心は庶民の中にこそ無意識のうちに、暗黙知のやうに見事に息づいてゐるからである。庶民の文化から絶縁するとは「感情の浅薄」を保証するやうなものである、とオーウェルは考へたのである。そして明示的に決して表される事のない庶民の愛国心に

与するといふ事は「歴史の感覚」を体得する事とも無縁ではなかつたのである。ただ社会主義者オーウェルは、知性と愛国心との結合が行はれ得るのは、社会主義においてのみであると信じてゐた。そのやうな意味合ひのものが次の文に窺へる筈である。

> 愛国心は保守主義とは何の関係もない、それは実際保守主義とは逆のものである。なぜならそれは、変化してやまないけれども不思議にも同一だと感じられる或るものへの献身を意味するからである。それは未来と過去とを繋ぐ橋である。真の革命家が国際主義者であつた例はない。[47]

愛国心が保守思想と無縁であるといふ断定は大いに疑問とされねばならないが、愛国心を盲腸のやうに切除して啓蒙されたつもりでゐる、感情の浅薄な人士、歴史の感覚を喪失した人士にとつて、文学と政治の退引きならぬ関係が理解を絶したものであり続けるのは不思議ではないだらう。このやうな進歩的人士は、「非常時の政策」に協力したオーウェルを、「非常時の思想」を掻き抱いた作家と看做し、「非常時の政策」に協力した期間を不毛の期間と決めつけて能事終れりとするのである。小林秀雄、即ち「極く当り前に、だが根強く生活してゐる日本人」[48]、「黙つてゐるもう一人の微妙な現代日本人」[49]の側に立つて、思索し物を書いた小林秀雄に関しても同様に浅薄な批判が、進歩的人士によつて行はれるのもまた必至、と付言しておかなければならない。

注

(1) W. J. West, 'Introduction,' to *Orwell : The War Broadcasts*, London : Duckworth/British Corporation, 1985, p. 19.

(2) *Ibid.*, p. 37.

(3) George Orwell. *The Collected Essays,Journalism and Letters of George Orwell* (以下 CEJL 으로 약칭) Vol. I, London: Secker & Warburg, 1968, p. 6.

(4) *Ibid.*, P. 6.

(5) *Ibid.*, p. 7.

(6) George Orwell, *CEJL*, Vol. II, p. 224.

(7) W. J. West, op. cit., p. 13.

(8) *Ibid.*, p. 16.

(9) Bernard Crick, *George Orwell : A Life*. Boston: Little, Brown and Company, 1980, p. 281.

(10) Bernard Crick, 'Introduction,' to *Nineteen Eighty Four* Oxford: Oxford University Press, 1984, p. 63.

(11) George Orwell, *CEJL*, Vol. II, p. 316.

(12) W. J. West, op. cit., p. 21.

(13) George Orwell, *CEJL*. Vol. II, p. 316.

(15) *Ibid.*, p. 316.

(16) George Orwell, *CEJL*, Vol. IV, pp. 154~155.

(17) W. J. West, op. cit., p. 60.

(18) *Ibid.*, p. 60.

(19) George Orwell, *CEJL*, Vol. 1, p. 7.

(20) Ignazio Silone, "The Fox", translated from the Italian by Gwenda David and Eric Mosbacher, in *New Writing* ed. by John Lehman, IV Autumn 1937, London: Lawrence and Wishart, 1937, p. 34.

(21) George Orwell : *Orwell : The War Broadcasts*, ed. by W. J. West, p. 147.

(22) George Orwell, *CEJL*, Vol. I, p. 7.

(23) George Orwell, *CEJL*, Vol. II, p. 170.

(24) *Ibid.*, p. 196.

(25) *Ibid.*, p. 206.

(26) *Ibid.*, p. 205.
(27) *Ibid.*, p. 206.
(28) *Ibid.*, p. 206.
(29) *Ibid.*, p. 206.
(30) *Ibid.*, p. 213.
(31) *Ibid.*, p. 218.
(32) 斎藤茂吉『斎藤茂吉選集』第八巻、岩波書店、五五頁。
(33) *Ibid.*, p. 111.
(34) *Ibib.*, p. 170.
(35) *Ibid.*, p. 160.
(36) 小林秀雄『小林秀雄全集』第七巻、新潮社一四一頁～一四三頁。
(37) 同書一六八頁。
(38) George Orwell, *CEJL*, Vol. II, p. 14.
(39) 小林秀雄『小林秀雄全集』第七巻、三四頁～三五頁。
(40) 同書一三六頁。
(41) 同書一三八頁。
(42) George Orwell, *CEJL*, Vol. II, p. 276.
(43) *Ibid.*, p. 141.
(44) 小林秀雄『小林秀雄全集』第七巻、七六頁。
(45) George Orwell, *CEJL*, Vol. II. p. 75.
(46) *Ibid.*, p. 75.
(47) *Ibid.*, p. 103.
(48) 小林秀雄『小林秀雄全集』第七巻、二九頁。
(49) 同書一八頁。